

新人Ns ヒューマンエラー関連要因に関する分析 (1)

○ 兵藤好美 (岡山大学 医学部) , 田中共子 (岡山大学 文学部)

Key words : 新人Ns, ヒューマンエラー関連要因, 判断・決定のミス

問 題

医療事故やヒヤリ・ハット分析の多くは、事例検討もしくは単純集計によってきたが、近年、看護のヒヤリ・ハット事例の発生要因分析が、与薬エラーを中心として大規模に行われるようになってきた。しかしながら、確立された分析方法はなく、発生要因の関係性を全体的に据え、介入までを見据えた研究は殆ど見あたらない。

Ns(看護師)は患者の一番傍におり、医療行為という引き金を最後に引く存在である。特に知識・技術のない新人Nsの場合は、事故予防のための予防教育が期待される。そこで新人Nsが遭遇しているヒューマンエラー関連要因に関する予備調査を行い、数量化 Ⅱ 類による分析を行ったので報告する。

方 法

調査対象 : 2003年4月、A病院に勤務する新人Ns 45名のうち、インタビュー調査への協力が得られた8名。調査期間は、2003年10月の1ヵ月間。

調査方法 : 就職後約半年間に体験したヒヤリハット事例の概略を把握するための、非構造的面接調査を行った。その後、「情報処理過程で発生するエラーの形態とその直接原因」(林, 1984)をもとに作成した質問紙を用いて、ヒューマンエラー関連要因に関する遭遇の有無・内容・危険関連度に関する構造的面接調査を行った。なおプライバシーに配慮し、回答は自由意思であること等を説明して、倫理的配慮に努めた。

質問項目 エラーの形態と原因 : A. 情報の不備(1)情報伝達・不正確 (2)情報内容不明確(3)表示方法不適當(4)環境の不備・妨害, B. 認知確認のミス(1)疲労・居眠り(2)計器目盛り誤りやすい(3)色・形・配列の似かよ(4)情報として認識せず(知識・経験不足)(5)思い込み(確認するまでもなく確か)(6)思い込み(仲間既に確認済み), C. 判断・決定のミス(1)記憶違い(2)状況複雑すぎ(3)時間切迫・気づかず(4)他の用件割り込み(5)思い込み(相手は知っている), D. 操作ミス(1)次の操作気になり、手順間違え, E. 確認ミス(1)確認するつもりだったが、何かのはずみで忘れる, 以上17項目に関する遭遇の有無とその内容

結 果

医療現場で遭遇するヒューマンエラー発生関連要因遭遇の有無をもとに、数量化 Ⅱ 類を用いた分析を行った (Fig. 1)。なお該当した項目の具体例については(斜字)に示した。

軸(上下)については内的要因 外的要因軸, 軸(左右)については情報入力阻害 誤認軸と命名した。なおヒューマンエラー関連要因は、大きく3つのグループ(情報入力阻害関係, 内的要因関係, 外的・誤認関係)に分類された。

座標軸交点に最も近く位置していたのはC(4)「他の用件が割り込み、それに気を奪われる」(Drからの急な口頭指示・電話・Nsコール・患者から呼ばれる等により、前の用件を忘れる), C(3)「時間切迫で慌てていて、気がつかない」(ある時間帯に集中して業務が重なり、点滴更新の遅れや患者氏名の確認不足に繋がる、手術室への搬送人数が多く、パニックになる等)であった。次いで以下の要因が、その近くに位置した。A(1)「情報が正確に与えられない・伝達されない」(Dr Ns : 口頭・紙切れによる伝達・指示多数, Ns

Ns : 他のメンバーに判っていないも、新人Nsには正確に伝わらず), C(5)「思い込み(相手は知っている)」「検査のための絶食伝達済み 理解できておらず、食事摂取、尿量測定は前日もあったので、方法は理解できていると判断 患者は実施せず」, B(5)「思い込み(確認するまでもない)」「点滴速度・持続性過信、服薬自己管理可で、飲めていると認識 降圧剤薬切れ」, C(1)「記憶違いで、事物や名称を間違っ

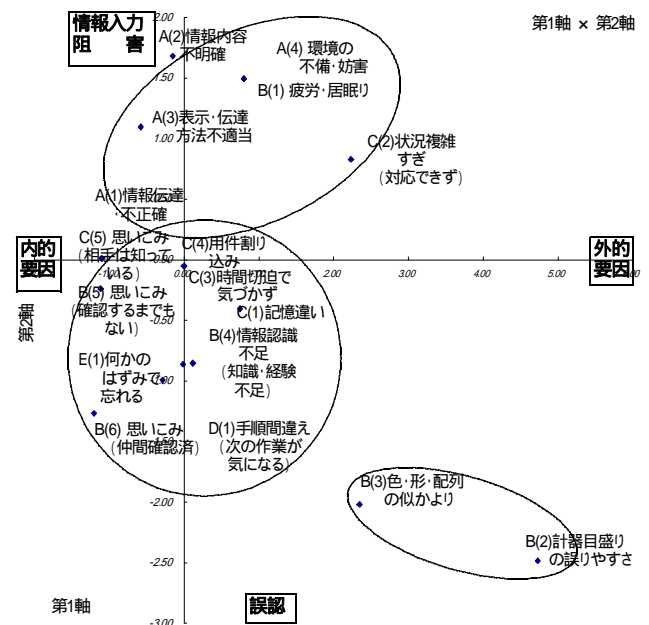


Fig.1 新人Nsが遭遇しているヒューマンエラー関連要因に関する分析

考 察

看護は正確さ・緻密さ及び慎重さが要求され、そのためには集中できる環境や時間的余裕が不可欠である。しかしながら医療現場では「他の用件の割り込み」に気を奪われたり、「時間切迫で慌てていて気がつかない」といった判断・決定のミスに繋がる体験が多く、業務的要求との矛盾がある。さらに、的確な行動の出発点であるべき「情報が正確に伝達されず」、その情報が注射や投薬・処置の変更等、命に関わることであれば、大きな問題に繋がる。

Ns が事前説明、行為の確認を常に心がけていても、相手は知っている、確認するまでもないといった「思い込み」によるトラブルも発生している。新人Nsは情報の不足やゆがみに加えて、自分の内的・外的な要因によって、医療事故の可能性に取り巻かれたストレスフルな状況に置かれていると言える。

【引用文献】 林 喜男 1984 人間信頼性工学 海文堂出版 (HYODO Yoshimi, TANAKA Tomoko)